

Title	胃ガン
Author(s)	藤田, 昌英
Citation	癌と人. 1976, 4, p. 10-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24206
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

2. 胃 ガ ン

藤 田 昌 英*

2-1. 日本人に多い胃ガン

日本では、ほかのガンに比べ、胃ガンにかかる人は、すば抜けて多のです。男ではガンで亡くなる人の半数近く、女では3割強が胃ガンです。

2-2. 動物にできた胃ガン

最近、2つの目を見はる研究が行われました。その1つは、今まで色々を試みても作れなかった動物の胃ガンを、国立ガンセンターの杉村博士らは、ネズミにある発ガン剤（ニトロソ化合物）を水に溶かして飲ませるだけで簡単に作れることを明らかにした事です。しかも、ネズミのような小動物だけでなく、犬のような大きい動物にも作れる様になり、異ガンの研究が一層すすむものと期待されます（前号の癌と犬の項を参照のこと）。

もう一つの研究は、Sanderと云う人が、それ自身、発ガン性のない2つの物質が胃酸で結合すると、さきの発ガン剤と似たニトロソ化合物になり、胃ガンを起すことを明らかにしたものです。もっともネズミの話です。しかし、注目すべきことは、この2つの物質は、日頃、誰でもが食べている食品の中に広く含まれていると言う事です。

2-3. 胃ガンは予防できるか？

ひとの胃ガンは、ほかのガンと同様に、その原因ははっきりしていません。しかし、人種により、胃ガンにかかる割合はずい分違います。アメリカ人は日本人の1/3と非常に少ないのです。このアメリカでも40年程前までは、今の2倍もあったのです。どうして、この様なことが起ったのでしょうか。食生活の変化が大きく関係していると言われていています。日本でも、熱いイモ

がゆで代表されるように米飯を多食する地方の人に胃ガンは多いのです。食物を直接消化する胃にできるガンは、食事の内容と関係が深いので、緑色野菜や牛乳などを多く摂るような、食生活の改善によって、胃ガンにかかる頻度は、近い将来、減らせそうです。

2-4. 治る胃ガンと手おくれの胃ガン

図1に示すように、胃ガンは、はじめ胃の壁の内側（粘膜）にでき、段々と深く、筋肉、漿膜へと浸入し、かつ、大きくなって行きます。

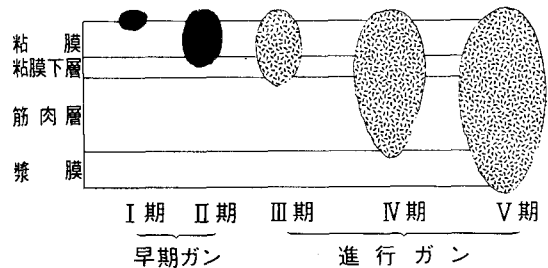


図1. 胃ガンの進み方

この胃の粘膜か粘膜下層どまりのガンを早期ガンと言い、手術によって、まず治すことが可能です。ところが、もう少しガンが進んでくると、手術して、ガンを全部とってしまったと思っても、図2に示すように、かなりの例で再発

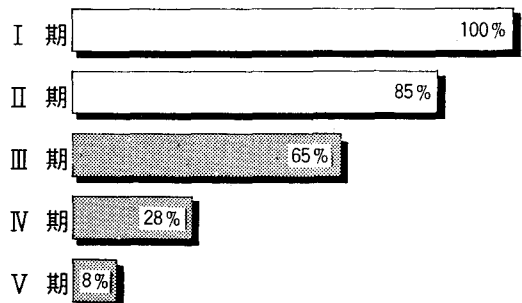


図2. 胃ガンの5年生存率（癌研調査）

* 大阪大学講師（微生物病研究所附属病院外科）

して来るのです。それは、手術の前に、すでに目に見えないガン細胞が、遠くへ飛び火していたからに他なりません。

胃ガンは、図3のように、ある大きになると、まず、胃周囲の局所リンパ節に転移し、さらに、進むと、遠隔リンパ節や、腹膜に飛び散り、一方では、血液に入り、肝臓や肺臓にも転移します。うまく手術すれば治せるのは、局所リンパ節どまりまでの進行胃ガンに限られます。

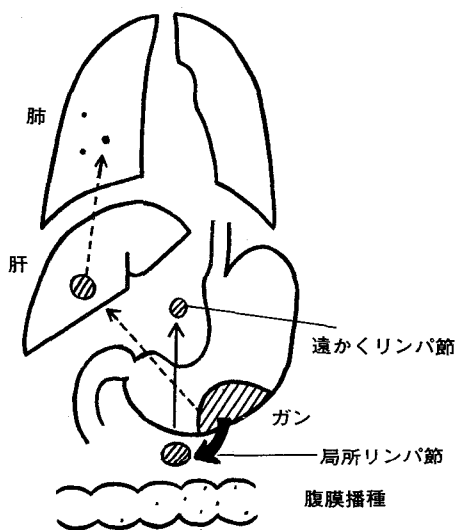


図3. 胃ガンの転移

2-5. 胃ガンには顔がある

一口に胃ガンと言っても、一つ一つ違った顔をもっています。形だけでなく、性質も違います。形のちがいは、ボルマン0からⅣの5つの型に分けられます。0型とは、粘膜にとどまり、専門家がみても、胃炎(ただれ)や胃潰瘍と区別が付きにくいもの、キノコ状に突き出したポリープと似たものなどです。ⅠからⅣ型は進行した胃ガンで、潰瘍を伴う限局型、どこまでがガンか判然しないもの等、さまざまです。

一方、顕微鏡でも、その形は様々です。専門的な分類や説明は省きますが、大きくは、分化型と未分化型に分かれ、それぞれが次に述べるような特徴をもっています。分化型は、炎症の1種である腸上皮に化生した粘膜に似ていて、化生の多い老人に多く発生します。そして、肉眼的には限局型で、肝臓やリンパ節によく転

移します。一方、未分化型は、胃の粘膜そのものに似ていて、若い人に多く発生します。肉眼的には、び慢性の広がりをもつものが多く、ガンは周囲の組織へ浸潤しながら増殖し、ガン性腹膜炎をよく起す性質のわるいガンです。

2-6. 特有の症状はあるか？

胃ガンが粘膜に発生してから、進行して患者の命を奪うまでの期間は、10年± x と言われていています。そのうち、かなりの期間は、早期ガンにとどまり、無愁訴胃ガンなのです。言い換えれば、胃ガンによる何らかの症状が現れるまでに、何の苦痛もない期間が、かなりあると言うことです。

また、症状の現れ方は、胃ガンのできる場所によって随分ちがいます。胃の入口や出口の狭い道路にできると、狭窄による症状が、比較的早く出ます。また、食物の通路にあたる胃の小弯沿いに発生したものに較べると、大弯側にできたものは、なかなか症状が出にくいのです。この場合は、ほとんど無症状で見つかり手術したのに、すでに手おくれと言う事も起ります。

一般には、何らかの上腹部の異常感、むねやけ、げっぷ、はき気、食物の好みの変化、痛みなどの症状で検査をうけ、胃ガンを見つけられる事が多いのです。しかし、これらは胃ガンに特有の症状と言う訳ではありません。胃潰瘍や胃炎などの他の胃の病気、肝臓や膵臓の病気でも同じような症状が見られます。大切な事は、こんな症状の時、まず、胃ガンに目を向けて、専門の医師に見てもらう事です。最も困るのは、自分で潰瘍だ等と決めつけたり、胃ガンだからもう助からないと決めこんで、医師に見せない人がいる事です。

2-7. 胃カメラ検査を受けよう

さっきも触れたように、胃ガンと紛らわしい病気に、胃潰瘍やポリープなどがあります。医師を訪れ、レントゲンを撮っても、これらの病気と区別のつきにくい事があります。そこで、胃カメラ検査、さらには胃生検を行って、はじめて、ガンかどうか確かめられるのです。ところが、カメラを嫌がって逃げ、他の医師にレン

トゲンを繰り返し撮ってもらう人がいます。このような人は、結果としては、潰瘍として、薬を飲み続けたり、そのまま放置したりすることになります。こんな人の中から、折角、医師を訪れながら手おくれのガンが出るのです。

2-8. 定期検診を受けよう。

ほかの病気で入院し、たまたま検査した胃レントゲンで発見された胃ガンには、早期のものが多いのです。一方、嘔吐などの症状が進んでから医師を訪れた人は、すでに手おくれのガンである事が多いのです。35才を過ぎたら、毎年1回、胃を専門とする所で、レントゲン検査を受けるか、信頼のおける、地域の集団検診などを受けることです。そして、異常を指摘されたら、恐れず胃カメラ等の精密検査を受けましょう。胃ガンの診断技術は、日本で開発され、世界で最も高い水準にあり、精密検査で見逃がされる胃ガンは、まずありません。しかし、去年、精密に調べたから今年は受けないと言う人がいますが、これは間違いです。早期に見つかりさえすれば、胃ガンも100%近く治るのです。毎年、信頼のおける検診を受ける方が、高い生命保険を掛けるより大切ではないでしょうか。

2-9. 治療は専門の病院で

知識の向上、集団検診の普及で、早期胃ガンの割合が増え、約10年前から、少しづつですが、胃ガンで死ぬ人が減って来たことは喜ばしい事です。しかし、現在でも、手術を受ける胃ガンの8割位は進行胃ガンなのです。胃ガンの転移が起っていても、それが胃の附近のリンパ節までに滞っておれば、正しい廓清手術が行われれば治るはずですが、また、わずかに残ったガン細胞に対しては、手術後、薬を色々、工夫して使うことにより、再発を防ぐ可能性がある事がわかって来ています。このように書いて来れば、信頼のおける専門の病院で治療を受けることの重要性が理解していただけたと思います。

2 10. おわりに

胃ガンはおそろしい病気です。しかし、今や、早く見つかりさえすれば、必ず治る時代が来ました。毎年1回、信頼のおける検診を受けましょう。早く、術後「貴方の胃ガンは早期でした」と私たちが言い、貴方がたも、「私は胃ガンから命びろいしました」と笑顔で暮らせる日が来る事を望んでいます。